



聖書が本当に言っていること

鞭木由行
IOCCpress



聖書が本当に言っていること

鞭木由行

IOCCpress

はじめに

「キリスト教」と言っても、その意味するところは様々です。それはこの言葉をどう定義して使うかによります。もつとも広い意味で使うと、西洋は、キリスト教国であり、そこに住む人は皆キリスト教徒ということになります。テレビを初めとするマスコミなどでそのような言い方をしているのをしばしば見かけます。しかし、それは日本人が皆仏教徒というのと同じです。しかし、現実の日本人は葬儀やその他の特別な時以外、仏教には縁のない生き方・考え方をしています。ですから、日本人を仏教徒に分類するのは、やはり正しくないと考えるでしょう。同じように、米国人やヨーロッパ人を「キリスト教徒」と分類してしまうのは、随分乱暴な話なのです。ただ、西洋文化の背景にキリスト教がしみ込んでいることは認められます。しかし、そこからキリスト教の本質を知ることとは出来ません。キリスト教を純粹に理解するためには、やはり、聖書そのものから聞かなければならないのです。そこには、カトリックもプロテスタントもありません。長い歴史に由来する教派的違いもありません。ただ聖書によつてのみ、私たちは、キリスト教が本来その起源においてあったところものを知ることが出来るのです。それは、もつとも純粹な形で、私たちにキリスト教が何であつたかを教えてくれます。

この小冊子は、少しでもキリスト教に興味のある方々に、聖

書の言葉を直接読んで、キリスト教を理解するための助けとなるように書かれました。この書物は聖書から選ばれた三十二の言葉からなっています。その言葉を読むことによつて、キリスト教とは何か、あるいは、イエス・キリストの与える救いとは何かをご理解いただけると思います。最初に、選ばれた聖書の言葉をお読みください。暫く考えた後、その解説をお読みいただければ、その聖書箇所を理解が深まるでしょう。こうして、三十二日間これを用いることによつて、イエス・キリストの福音を理解することが出来るはずです。これをお読みになる一人一人が、この書物を通してキリストの救いを見いだすことを心より願っております。

聖書の言葉は次の五つのテーマに従つて選ばれ、分類されています。なお引用には新改訳聖書を用いました。

- 第一章は、私達が神について知っておくべきこと。
- 第二章は、私達が人間について知っておくべきこと。
- 第三章は、イエス・キリストの救いについてです。
- 第四章は、その救いを得るための信仰についてです。
- 第五章は、私たちの永遠の状態についてです。

二〇〇〇年六月

鞭木由行

目次 ● 聖書が本当に言っていること

第一部 キリスト教への手引き……………7

第一章 神について……………9

はじめに／神はおられるのか／神を知っているのに

ただひとりの神／すべての創造者／すべての支配者／神の三位一体

第二章 人間について……………19

神と人／神に対する規準／人に対する規準／罪の広範囲な影響

罪にとらわれた私たち／罪の原因／罪の結果

第三章 キリストについて……………29

救い主の必要／神のひとり子／人となられた神／そのきよい生涯

十字架の死によって／死からの復活によって／完全な救い

第四章 救いについて……………39

悔い改め／信仰によって／新しく生まれること

信じる決心をすること／みことば／祈り／教会

第五章 永遠の望みについて……………49

主イエスの再臨／よみがえり／さばき／新しい天と新しい地

第二部

慰め励ます聖書の言葉

55

病床にあるとき／病いの理由に苦しむとき／疲れを覚えるとき

心配事に悩むとき／思い煩いに心沈むとき／死を恐れるとき

困難に直面しているとき／励ましが必要なとき

理由の分からない困難に直面しているとき／人生の目的に悩むとき

第三部

キリスト教への質問に答えて

63

○イエス・キリストとは、どういう意味ですか。

○イエス・キリストは本当に実在したのですか。

○聖書とはどんな書物ですか。旧約聖書と新約聖書の違いは何ですか。

○聖書に書いてあることは本当に信用できるのですか。

○キリスト教は、なぜ多くの教派に分かれているのですか。

○信じる者だけを救うというのは、キリスト教は心が狭いのではないですか。

○神は愛ならば全ての人を救うべきではないでしょうか。

○キリスト教世界の中に、宗教戦争があるのは、何故ですか。

○カトリックとプロテスタントの違いは何ですか。

○キリスト教では人類の始まりはアダムとエバ（俗称イブ）と言っているようですが、

人間は、進化して生まれてきたのではないですか。

○『ものみの塔』という雑誌をもって勧誘に回っている人々もキリスト教ですか。

○神がいるなら、なぜ神は、人間を戦争や苦しみから救わないのですか。

○宗教は結局どれも同じではないですか。

第一部

キリスト教への手引き

第一章 神について

第一章では、神についての七つの言葉を考えます。これらは、神について何を語っているでしょうか。

それは、この世界には永遠・無限・不変の唯一の神がおられるということ、さらにこの神は、全てのものの創造者であり、支配者であるということ、そしてこの神は私たちを深く愛する神であるということです。

第一 はじめに

初めに、神が天と地を創造した。

旧約聖書・創世記 一章一節

これは、聖書の冒頭の言葉です。これからキリスト教を考えるにあたり、最初にこの言葉を心に刻みたいと思います。この言葉によって、私達はこれまでとは全く違った世界に目を向けることになるのです。

「初めに」とは、全宇宙の最初の時点を示しています。現在から時間を逆にさかのぼって、時間の始まった、その出発点において何が起きたのでしょうか。最初にあったのは、神による創造であったと聖書は告げているのです。神が人間や動物も含めて全てを創造したのであり、それゆえ、今日、全てのものが存在しているのです。万物はその存在の起源を神におっているのです。こうして永遠から存在していた神と、ある時点で神によって創造された被造物の世界と、二種類のものが存在するのです。この言葉は聖書のすべての考えの大前提です。それは、私たちが考えてきた世界とは全く違う、聖書の世界観を教えているのです。

(一) 時間と空間の世界の出発点。目に見えるもの、すべての存在するものの最初の出発点をさす。

さらに、この言葉は、この世界には始まりがあったことを明らかにしています。大宇宙は永遠ではありません。ある時点から始まったのです。そのことは近代科学によっても明らかにされました。何かが始まるときには、必ず原因があります。その宇宙の原因が神であることを教えているのです。

また、神と自然とはまったく別々のものであって、神は自然の中にいるのでもなく、自然が神でもありません。それは太陽や月、自然現象や動物までも神として拝んでいた世界の中で、まったく新しい世界観です。自然は造られたものであって、それゆえ大宇宙、大宇宙の背後には、神の意志が存在するのです。しかし、もつと重要なことは、神が創造したのであれば、世界は偶然に存在しているのではないということです。そこには、創造者の意図があったのです。ですから、私たち人間も偶然の存在ではありません。偶然の進化で誕生したのではなく、目的を持って創造されたものなのです。必然的な存在なのです。後で考えますように、この事実を認めることによってのみ、私たちの人生の意味は明らかになって来るのです。

第二 神はおられるのか

神について知られることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです。神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。

新約聖書・ローマ人への手紙 一章一九―二〇節

「果たして神はいるのだろうか。」そういう疑問を誰もが一度は持つたことがあるでしょう。私たちはこの様な問題は人間の理解力を越えていると思いがちですが、聖書は違います。右の聖書の言葉は、私達が神を知っているはずだと言っています。

「神の本性」つまり「神の永遠の力と神性」は、被造物、即ち自然や宇宙の中にはつきりと認められるのであって、弁解の余地がない、とまで言っています。なぜその様なことが言えるのでしょうか。それは私達が被造物の世界を考えると分かります。私達が自然の世界や宇宙を見るとき、その美しさに感動したり、その自然の法則や規則正しさに驚きます。そのとき、私達はこのような美しさや、規則性が混沌から偶然に出来たと考えるべきでしょうか。いいえ、誰かが造ったと考える方が理にか

(一) 私たち人間のこと。

なっています。例えば、私たちがある日、未知の世界に迷い込み、そこに見事な建物や整備された町並みを発見したとしましょう。そこには、全然人影が見あたらなくても、私たちは、偶然に建材や物資が風に運ばれて飛んできて、何億年も経った結果偶然にこうなったとは考えないでしょう。私たちは、やはり誰かが、つまり人格を持った存在（人間）が造ったと考えるのです。つまり、人間は規則正しくできあがっている物や現象を見るとき、必ず、誰かが造ったと考えるのです。そのことは宇宙や自然界を見るときも当てはまるはずで、幾何学模様の蜘蛛の巣や、ミツバチの巣、人体構造の巧妙さ等々自然界の不思議を見て、私たちはこれが偶然の結果と考えることは出来ません。私達は自然の規則正しさの背後に神の働きのしるしを見つけることができるはずで、三千年も前にユダヤの詩人は大空を仰いでこのように歌いました。「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」私たちが、星空を見上げるとき、そこに創造者なる神を見ることが出来るのです。この計画性こそ、神の存在の証拠であり、ですから弁解の余地はないと聖書は言うのです。

第三 神を知っているのに

それゆえ、彼らは神を知っていないながら、その神を神としてあげず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥獣、はうもののかたち⁽¹⁾に似た物と代えてしまいました。

新約聖書・ローマ人への手紙 一章二一—二三節

果たして、私たちは、神がおられることが分からないのでしょうか。いいえ、この聖書の言葉は、私たちが、神を知っているのに神を崇めようとしないだけだと言っています。

私たち人間が神を知っていることは、私達の世界を見ればよく分かります。例えば、人間のいるところどこへ行っても必ず宗教があります。文化的には、未開と言われるような国や地域でも、また文明が最高度に発展している国々でも、宗教がない国というのはありません。また歴史をたどつても、人間が宗教を持たなかつた時代というのはありません。人間のいるところ必ず神を信じるということがあつたのです。逆に人間以外の動物世界にこの様な現象は一切ないことも考えるべきでしょう。どんなに利口な動物でも、神に祈りをささげることはありませ

んし、生きる目的に悩むこともありませぬ。このことは、人間の心の中に普遍的に宗教心、あるいは、神を求める思いがあるからと言つてよいでしょう。そのことは、人間が生まれながらに、神についての知識を持つて示しているのです。それは様々な形で歪められていますが、確かにあるのです。

そのような神を求める心は、宗教心として外に現れてきます。そこで人間は様々な宗教を作り出して来ました。その中で、人間や鳥、獣、へび、キツネや太陽、あらゆる物を神として拝むようになりました。人間のこの様な行動は人間が神を知つていることを示しています。只本当の神が誰なのかわからないので、自分を神としたり、自然を神としているだけなのです。真の神以外のものを神とすることによつて人間はむなしくなり、いよいよ暗くなりました。しかし、神は、神に向かうように私たちを創造したのです。ですから、真実の神以外に私たちの心を本当に満たすことは出来ませぬ。聖書は、そのような人間の本質的な欲求のことを「神は人の心に、永遠への思いを与えられた。」(旧約聖書・伝道者の書 三章一一節)と美しく語っています。人間の心は神を知っているので、神に向かうのです。

(一) ここでは、彼らとは人間一般、つまり、私たちです。

第四 ただひとりの神

私たちは、世の偶像の神は実際にはないものであること、また、唯一の神以外には神は存在しないことを知っています。なるほど、多くの神や、多くの主があるので、神々と呼ばれるものならば、天にも地にもありますが、私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、すべてのものはこの神から出ており、私たちもこの神のために存在しているのです。

新約聖書・コリント人への手紙第一 八章四―六節

ところで、真実の神は何人いるのでしょうか。昔から、日本人は八百万の神というくらい無数の神々がいると考えてきました。しかし、神は本当のところただひとりです。

この聖書の箇所は、パウロという使徒（イエス・キリストの弟子）が、コリントにある教会に宛てた手紙の一部です。コリントは、古代ギリシャに栄えた商業都市で、当時のギリシャ人は日本人と同じ様に多くの神々がいると考えていました。このような神々にいけにえとしてささげられた肉をクリスチャンは食べるべきかどうかが問題になったとき、パウロは、「この世の神々というのは実際には存在しない」。存在しているのは「唯一の神だけである」と語ったのです。

私達は神というものをどの様に考えるべきでしょうか。ある人々は、神を天に座っているお人好しのおじいさんのように想

像して、自分に都合の良い、多くの神々を造ってきました。それは大抵の場合人間の欲望の延長です。しかし、神は、決して人間を拡大した物ではありません。神の本質は私たちに捕らえられません。神のご性質と働きから神について考えることは出来ません。

神の第一の特質はあらゆる点で無限であることです。神は、時間において無限です。ですから、永遠です。また空間（場所）においても無限ですから、同時にどこにでもいる（偏在）ことができます。また知恵においても力においても無限なので、全知全能のお方です。また道徳的な性質においても、神は無限であり完全です。ですから、神はもつとも愛に富んだお方であり、もつとも正しいお方であり、全ての被造物に限りなく憐れみ深いお方です。私たちが忘れてならない神の重要な性質は、神の愛です。「神は愛なり」と聖書は、神のもつとも著しい性質の一つとして愛を教えています。神は、その愛をもつて私たちを愛しているお方です。その愛こそ、私たち人間を滅びから救うためにイエス・キリストによる救いを計画された動機なのです。

第五 すべての創造者

主よ。^(二) われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けらるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。

新約聖書・ヨハネの黙示録 四章一二節

「初めに神が天と地を創造した」という聖書の冒頭の言葉を考えましたが、もう一度改めて、神のなさった創造を考えましょう。聖書は繰り返し、繰り返し、天地万物は神が創造したものであることを主張しています。その創造の具体的な順序や、展開については聖書は多くを語っていませんが、最終的に全てのものの起源は神にあると言っているのです。聖書が神と呼ぶ方は、このような万物の創造者です。全てのものは神が創造したので存在しているのです。ですから、別の箇所では聖書は神のことを「万物の存在の目的であり、また原因でもある方」（新約聖書・ペル人への手紙 二章一〇節）と呼んでいます。ですから、神は当然複数ではなく、唯一のお方です。

神が創造者であれば、神こそ、全てのものが存在している原因です。原因であれば、神が万物の存在の目的になるのも当然

でしょう。なぜなら、例えば、人間の腕時計を例に考えてみましょう。腕時計は、人間が創造しました。ですから人間が腕時計の存在の原因です。そして、人間に時間を教えることが時計の存在の目的なのです。しかし、この時計は、人間（造り主）から離れたところでは、その存在は意義を失います。道端のどぶの中に落ちていたのでは、どんなに正確に時を刻んでも、ただの鉄屑にすぎません。人間の腕にはめられ、そのような人間との関係が確立されており、人間に時間を教えるという目的を果たしている限りにおいて、時計は存在する意義を持っているのです。

同様に、私たち人間の起源が神にあるとすれば、その神との関係がなくては、人間はただの屑となってしまう。神が全ての創造者であれば、全ての者は神のために存在しており、人間が神を礼拝することは当然でしょう。そして、創造者以外の神々を礼拝することは、間違いということになります。神との関係が破壊されているということこそ、人間の混乱と悲劇の根源となつていっているのです。

(二) これは、神に対する、祈りのことばです。神の栄光を賛美し神の偉大さを歌っています。

第六 すべての支配者

二羽の雀は一アサリオン^(一)で売っているでしょう。しかし、そんな雀の一羽でも、あなたがたの父のお許しなしには地に落ちることはありません。また、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。だから恐れることはありません。あなたがたは、たくさん雀よりもすぐれた者です。

新約聖書・マタイの福音書 一〇章二九―三二節

私たちは、すでに「初めに神が天と地を創造した。」ということを書の言葉を考えました。そこで、神とは万物の創造者であることを考えたのです。しかし、神は天と地を創造して、その働きを終えてしまったわけではありません。また神は天と地を創造した後、被造物に興味を失って、引力の法則のような自然法則に全てをゆだねたわけでもありません。神は、ご自分の創造された世界に深く関わりを持ち、働きを続けているお方なのです。

この聖書の言葉は、神が雀一羽でさえも失われることを望んではいない、私達の髪の毛一本に至るまで深い関心を持つていることを明らかにしています。ましてや私達人間のいのちをど

うして見放してしまうことがあるでしょうか。神は創造したものを、ご自分の愛のご計画に従って保ち、導こうとしておられるのです。

私たちは、この様な、神の守りと導きをどの様に知ることができるでしょうか。聖書がそう言っているというだけでなく、私たちは自然界での経験を通してそれを知ることができます。

太陽の恵み、雨の恵み、空気、食物、雨、これらを考えると、私たちのいのちは、実際に神の力によって保たれているとしか言いようがありません。地球と太陽との距離が少しでも違えば、地球は氷の世界か、砂漠の世界となりました。これは偶然ではありません。神は「恵みをもって、天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満たしてください」（新約聖書・使徒の働き 十四章一七節）お方なのです。神の御手から離れたところで、何事かが起きることはあり得ないのです。ですから、私たちは悲しい経験や悲劇的事件、天災と言われるような出来事に直面しても、それを暗い運命とあきらめる必要はありません。なおも、そこに神の最善のご計画を信じる事が出来るのです。

(一) 当時の金貨の単位。アサリオンは最小単位の銅硬貨でした。

(二) 天の神のこと。イエスはしばしば神を「私たちの父」と呼びました。

第七 神の三位一体

それゆえ、あなたがたは行つて、あらゆる国の人々を弟子としないさい。そして、父、子、聖霊の御名みなによってバプテスマ二を授けなさい。

新約聖書・マタイの福音書 二八章一九節

この聖書箇所は、イエス・キリストが地上を去るとき、最後の言葉として弟子たちに命じたものです。主イエスは、洗礼を授けるとき、父と子と聖霊の御名によって洗礼を授けるように命じました。それ以後、教会はイエス・キリストを信じた人々に、父と子と聖霊の御名によって洗礼を授けてきました。ここで、「父」とは「父なる神」のことです。「子」とは神の御子なる「イエス・キリスト」です。それに「聖霊」とは、御霊とも呼ばれています。第三のお方です。この様に聖書では、三名のお方が神と呼ばれています。しかし、同時に神は唯一であることを聖書は繰り返し語っていて、そのことは前の第四番でも考えました。この一見矛盾する様なことを説明しているのが、「三位一体」ということです。

三位とは、父なる神、子なる神（イエス）、聖霊なる神の三

(一) バプテスマとは洗礼のことです。イエス・キリストはバプテスマのヨハネから洗礼を受けました。

者のことです。この三者は人格（位格）において三つに区別できますが、本質においては、同じひとりの神であつて、互いに上下の差異はありません。本質において一つでありながら、位格において三つである、このような神のあり方を私たちは三位一体と呼んでいるのです。

私たちは、創造者である神を知り尽くすことはとても出来ません。人間の言葉で語り尽くすこともできません。一つの本質に三つの位格（人格）を認めることは、私たちの理解力をはるかに越えたことです。少なくとも、それは私たちが経験的に知ることが出来ないことです。私たちの場合は、人間という一つの本質に誰々という一つの人格が備わっているだけです。しかし、神は人間と同じ存在ではありません。神の本質について語るには人間の存在も、経験も、言葉も不十分しかありません。しかし、聖書の言葉を学ぶとき、私たちは、神をこの様に理解する以外にないことを知らされます。これは、神が教えてくださった真理であつて、私たちの作り出した神についての考えではないのです。ですから、神が人間と違う存在の仕方をしていても、それに驚く必要はないでしょう。神には一つの本質の中に三つの人格的区別があり、そのことを三位一体と呼んでいきます。

神様を定義すると…

これまで、考えてきたような神（その方こそまことの神です）を定義するとどうなるでしょうか。人間の言葉で神を定義することは不可能ですが、私が知る限り最良の定義は、ウエストミンスター小教理問答書の定義です。「神とは霊であられ、その存在、知恵、力、義、善、真実において、無限、永遠、不変の方です。」

第二章 人間について

第二章では、私たち人間についての七つの言葉を考えます。

これらは、私たち人間について何を語っているでしょうか。

それは、全ての人が神を無視して、自己中心に生き、道徳的に墮落していること、それゆえ全ての人は永遠の滅びに向かっているということです。

第八 神と人

愚か者は心の中で、「神はいない」と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい事を行っている。

だれもかれも腐り果てている。

善を行う者はいない。ひとりもない。

旧約聖書・詩篇 一四篇一三節

これまで私たちは、主に神について考えてきましたが、ここからは私たち人間について考えていくこととなります。聖書はまた私たち人間についても実に多くのことを語っています。その中心にあるのは、人がまことの神に対してどのように生きているかという問題です。右の聖書の言葉は、今から三千年も前に古代イスラエル人が書いた詩の一節ですが、現代人の本質を見抜いていて恐ろしいくらいです。どれほど多くの現代人が、この詩人の語るように「神はいない」という前提に立つて生きていることでしょうか。この世界に創造者である神がいることは弁解の余地がないほど明らかだ、と聖書は告げていますが、人間はその証拠を見ようとはせず、逆にな、心の中で「神はいない」と結論しています。

しかし、問題はそこに留まりません。「神はいない」という前提に立つとき、人間は罪に対するブレーキを失い、その結果善を行わず忌まわしいことを行うようになることを指摘してい

ます。つまり、この聖書は、私たち人間がだれ一人例外なく、罪人であることを鋭く指摘しているのです。誰も彼も腐り果てているのです。現に罪を犯さない人は誰もいません。どんな聖人、君主、偉大な宗教家でさえも例外ではありません。全ての人は罪を犯す存在であり、罪を現に犯しています。罪は人間の普遍的な事実です。私たちが現実の社会を見つめるならばこの罪の普遍的な事実がつかでしよう。この世界は、人間は罪を犯す存在だという前提で出来上がっています。どこの国にも警察と裁判所があります。家には鍵を掛けます。店には防犯ビデオが設置され、駅にはキセル防止の改札口があり、図書館の入り口には、盗難防止用の仕掛けが取り付けられています。どれもこれも、全ては人間が悪を行うことを証明しているのです。

自分がそのような罪人であることを人間は認めることが出来ません。それは、人間には本当に困難なことです。しかし、それは自分の行動の基準をどこにおくのかという問題でもありません。私たちが人との比較で自分の善し悪しを論じるのではなく、神の目から見た時、神の規準に照らし合わせる時、「誰もかれも腐り果てている」と聖書は言っているのです。

第九 神に対する規準

- 一、あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない。
- 二、あなたは、自分のために、偶像を造つてはならない。それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない。
- 三、あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。
- 四、安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。

出エジプト記 二〇章三十八節

この聖書の言葉は、モーセの十戒としてあまりにも有名なものです。これはその十戒の最初の四つの戒めを抜き書きしたものです。これまで学んできたように、私たちが神というお方を正しく理解するならば、神を敬うことは当然のことでしょう。なぜならその神は、万物の創造者、全知全能の神、永遠無限の神です。神はすべてのものの起源であり、それ故に私たちの存在の目的であるお方です。一方、私たち人間は弱く、一時的なもの、そのお方に造られた被造物にしか過ぎません。そうであれば、そのような神から離れて、私たちはどのように生きていくことが出来るでしょうか。親から離れて子供、生きられないように、本来、私たちが神から離れて生きていくことは出来ないのです。ですから、この戒めは、私たちが、真の神だけを礼拝

し、そのお方に仕えて生きるべきだと命じているのです。

今日の人類の根本的悲劇は、人々が真の神を忘れ、人間が自分で造り出した宗教や偶像を拜んでいることです。その偶像は必ずしも宗教的な形を取らないかもしれませんが。ある人にはお金や出世が神となり、またある人にはセックスが神です。ある人は事実上コンピューターに支配されています。またある人には子供が神となり、人生の絶対的な位置を占めています。このように偶像とは、要するに人間がそのために時間とエネルギーを惜しみなく費やしているものであり、その意味で偶像とは自分の欲望そのものです。偶像を拜むとは、人間が自分の欲望を追求していることを言っているのです。

今日、人間の最大の問題は、そこにあるのです。人間は、本来人間より高いもの、より高い価値のために生きるべき者でした。しかし、人間は自分の欲望（偶像）に任せ、自分の作り出したものの奴隷となっています。しかし、人間が本当に仕えるべきお方は、人間を造った神、永遠の創造者、唯一の真の神です。そのことなくしては、人間は正しい目標を失い、的はずれな一生を過ごし、本当の幸せを見いだすことは出来ません。

第一〇 人に対する規準

- 五、あなたの父と母を敬え。
- 六、殺してはならない。
- 七、姦淫かんいんしてはならない。
- 八、盗んではならない。
- 九、あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。
- 十、あなたの隣人の家を欲しがってはならない。

旧約聖書・出エジプト記 二〇章 二一―二七節

前回は、モーセの十戒の最初の四つを考えましたが、ここでは、後の六つを考えます。前半は、神に対する生き方でしたが、後半は、人間の人間に対する正しいあり方が語られています。第五戒は「父と母を敬え」です。これは両親に対する愛と従順を要求します。親子関係は最も重要な人間関係ですが、今日親を敬わない子供たちがどんなに増えてきたことでしょうか。第六戒の「殺してはならない」は、人に対して憎しみのないことです。実際に殺さなくても、私たちは心の中の憎しみやねたみでいくらでも人を殺しているでしょう。第七戒は「姦淫してはならない」ですが、それは夫婦以外のあらゆる性的関係を禁じています。婚前交渉や婚外交渉は中高生にまで広がっています。マスメディアによってセックスは今日の偶像となりました。第八戒は、盗みを禁じていますが、盗みはいつの時代にも最も普

遍的な罪でした。電車のキセルや釣銭のごまかしから、詐欺強盗まで日常茶飯事です。第九戒は偽りの証言を禁じていますが、これは言葉における嘘を禁じ、真実だけを語ることを要求しています。最後の「欲しがってはならない」は人間の心の中の問題であり、究極的な道徳です。このような客観的な基準に自身を照らす時、私たちの罪は明らかです。

しかし、ここに留まってはいただけません。主イエスは、なによりも心の中を問題にされました。「悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出てくる」と言われました。外側を取り繕っても神は心の中をご存知だからです。夫婦喧嘩から社会的不正や戦争に至るまで、その根は結局愛のない、人間の罪の性質から生まれて来るのです。この様な罪の性質は全ての人に共通した現実であり、私たちは例外なく神の前に罪人なのです。以上から、罪とは規準を犯すことと定義できます。日本にも法律があつて、それを破れば犯罪者となります。同様に神の法律を犯せば、神に対して罪人です。

第一一 罪の広範囲な影響

もはや、異邦人⁽¹⁾がむなししい心で歩んでいるように歩んではなりません。彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行いをむさぼるようになっていきます。

新約聖書・エペソ人への手紙 四章一七—一九節

この聖書の言葉は私たちに罪の影響の深刻さを述べています。罪の影響は、私たちの全存在に及んでいます。まず私たちの「心」はかたくなになっていきます。とても、神の言葉を素直に受け入れることは出来ない状態です。また私たちの「知性」は暗くなっています。ですから神に関すること、霊的なことについては、無知で盲目です。生まれながらの知性は、神のことを否定するのです。それは彼には馬鹿馬鹿しいことに思えるのです。しかも、そのように考える自分の知性の方が曇っているなどとは到底考えもしません。さらに、私たちの「良心」は、繰り返し行われてきた罪の習慣によって鈍くされ、「道徳的に無感覚に」なりました。

現代では、性に関する事柄において人間の良心は格別麻痺し

(一) この場合、異邦人とは、神を知らない全てのの人々を指している。

ています。良心の声は細いので、私たちが意識的に無視するやがて聞こえなくなるのです。たとえば小さなキセルであつても、最初は心臓がときどきするほどのことでしょう。しかし、それが常習的になると、そのような「ときどき」は聞こえなくなり、無感覚になるのです。あらゆる悪に対して私たちはある時点から麻痺してしまいます。もはや罪を罪とは感じなくなるのです。さらに私たちの「意志」は、どうでしょうか。私たちの意志でさえも例外ではなく、悪を欲する様になりました。さらに、愛、喜び、希望などの「心情」も罪の衝動に突き動かされ、私たちは自己中心に考えるようになります。そして、私たちがついていく「肉体」は、これら全ての罪を犯すための道具として働いているのです。

こうして、私たちの中には罪の影響から逃れているものは何も残っていません。私たちは全体的に罪の深刻な影響の下に置かれており、罪のとりこになりました。こうして、私たちは、心と行いと言葉において、日々神の前に罪を犯しているのです。

第二二 罪にとらわれた私たち

まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行つてい
る者はみな、罪の奴隷です。

新約聖書・ヨハネの福音書 八章三四節

罪の影響は人間の全体に及んでいることを考えましたが、同
時に罪の影響の深さにも注目する必要があります。ここで主イ
エスは、私たちは「罪の奴隷である」と言っています。また別
の箇所では使徒パウロは、「私たちは罪と罪過の中に死んでいた
者である」とさえ言っています。聖書は、私たちは、罪に支配
されており、そこから離れられない奴隷的狀態に陥っているこ
とを教えているのです。

イエス・キリストは、このことを木とその実にととえて次の
様に語りました。「木がよければ、その実も良しとし、木が悪
ければその実も悪いとしなさい。木の良し悪しはその実によつ
て知られるからです。」人間も同じで、人間の行い（実）が悪
いなら、それは人間自身（木）が悪いからだと言うのです。罪
を犯すから罪人と呼ばれるのではなく、罪人なので罪を犯すの
です。罪という性質に支配されているので必然的に罪を犯すの

(一) 重要なことを言うときに、主イエスはしばしばこういう言い方をした。原語
では「アーメン、アーメン」です。

です。リンゴの木は、リンゴの実を結びます。決して梨の実や
栗の実をならせません。それは出来ないことなのです。しかし、
リンゴの実を結ぶからリンゴの木ではありません。リンゴの木
なので、リンゴの実を結ぶのです。それは必然的なことです。
同様に、人間は、罪人だから罪を犯してしまうのです。それも
さけることが出来ません。

使徒パウロは、この様な人間の現実を自分の経験からこう語
りました。「私には、自分のしていることがわかりません。私
は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎む
ことを行っているからです。……もし私が自分でしたくないこ
とをしているのであれば、それを行つているのは、もはや私で
はなく、私のうちに住む罪です。」（新約聖書・ローマ人への手紙
七章一六二〇節）彼は自分がいやがつている罪をなぜ犯すの
か、と自分に問うているのです。その答えはただ一つです。そ
れは私の内に罪が住んでいるからです。その罪が私を支配し、
私を罪へと導いているのです。このように、私たちは例外なく
罪の奴隷なのです。私たちがこの道徳的無力さに気が付かない
でいるのは、私たちが罪に対して曖昧だからに過ぎません。

第二三 罪の原因

そういうわけで、ちようどひとりの人^(一)によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、……ちようどひとり^(二)の違反^(三)によってすべての人が罪に定められたのと同様に、ひとりの義の行為^(四)によってすべての人が義と認められ、いのちを与えられるのです。

新約聖書・ローマ人への手紙 五章一二、一八節

この聖書の言葉は、二人の人を対比しています。二人とは、最初の人アダムとイエス・キリストです。「ひとりの人によって罪が世界にはいった」とは、「アダムによって罪が世界にはいった」ということです。つまり、ここではなぜ人間が生まれながらにして罪の性質を持っているのかを説明しています。これは大変興味深いテーマです。誰も人間の中に罪の性質があるのか、その理由を説明できません。しかし、聖書は、その罪の原因を明らかにしています。実は、罪も死もアダムによって外から人間の世界に入ってきたと聖書は言うのです。

このことを理解するためには、創世記の三章の出来事を読まなければなりません。神は人間を創造し、エデンの園に置きま

(一) 人類の祖先アダムのこと。

(二) アダムの犯した最初の罪。

(三) イエス・キリストによる救いのこと。

した。その時、神は「善悪の知識の木」からは食べてはならないと命じました。しかし、それ以外の全ての木の実を食べて良かったのです。ですから、そこにはあり余る食料がありました。人間アダムは「善悪の知識の木」から取って食べる必要は何もありませんでした。それを食べない限り、アダムは神の前に正しい人だったのです。しかし、人間アダムは敢えてその木の実を食べたのです。これが人間の選択でした。人間アダムは、このとき神の意志に反して生きる道を選び取ったのです。それこそ人間の根本的な罪です。アダムは最初の人間として、全人類の代表としてこの決断をしました。それ故に、その影響は全ての人に及ぶことになったのです。聖書は、ここに人間の罪の根本原因を見ているのです。

最初の間が神にそむく選択をした後に、何が続いたでしょう。その罪の結果として神からの罰が人間にもたらされました。それが、死であり、苦しみであり、争いです。人間はそれ以後、この罪の支配を決定的に受けるようになったのです。

第一四 罪の結果

罪から来る報酬は死です。⁽¹⁾

新約聖書・ローマ人への手紙 第六章二三節

人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている。

新約聖書・ヘブル人への手紙 九章二七節

死とは何でしょうか。この重大な問題にこの聖書の言葉ははっきりと答えています。死というのは、罪から来る報酬である、と聖書は言っているのです。これはどういう意味なのか、もう少し厳密に考えてみる必要があります。昔から、報酬とは労働の当然の結果です。私たちは一生の間、罪のために働いて来たのですから、私たちはその「報酬」を受け取ることに成ります。罪のために働いた結果、私たちが受け取る報酬とは「死」です。それは、罪を犯した刑罰としての死なのです。私たちはよく「ガンで死んだ」などと言いますが、それは正しくありません。人間は病気になるなくても死にます。ある年齢以上は生きられないようになっていくのです。ですから人間は病気で死ぬのではなく、別の理由があるのです。それは罪から来る神の

さばきとしての死です。

死は、罪の結果としてはいり込んできました。アダムが罪を犯した直後に神はアダムにこの様に告げました。「あなたは顔に汗を流して糧を得、ついにあなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから、あなたはちりだから、ちりに帰らなければならぬ」。神はこうして、いのちの道を絶たれました。

アダムはそれからも生き続けましたが、すでに死ぬことが定まった人として限られた命を生きたのです。彼の生は「死」によつて象徴されるような領域へと移ったのです。

しかし、死んで終わりではありません。罪を犯した責任が残っています。右の聖書箇所は「人間には一度死ぬことと、死後にさばきを受けることが定まっている。」と教えています。正義の神が、不正をさばかずに放置することはあり得ません。死後には、永遠の滅びが待ち受けているのです。このように、罪が私たちにもたらす結果は、悲劇的でした。この地上の生涯で、あらゆる人間関係を破壊したばかりか、罪は私たちに死と永遠の滅びとをもたらすことになったのです。聖書が約束している救いとは、このような罪からの救いです。

(1) 罪を犯した結果、受け取ることになった報い。

パスカルの人間観

有名な哲学者パスカルは、人間を2つの観点から見つめました。それは人間の偉大さとみじめさです。人間が偉大であることについて多くを語る必要はありません。ほかの動物と比べるならば、人間の到達した芸術や科学の領域における偉大さはあまりにも明らかです。しかし、同時に人間は戦争や犯罪、離婚や家庭内の不和に見られるみじめさがあります。その両者を見つめないで人間を正しく把握することは出来ないでしょう。聖書はその両方を最も良く説明しています。

第三章 キリストについて

第三章では、私たちの救い主キリストについての七つ言葉を考えます。これらは、私たちの救いについて何を語っているのでしょうか。

それは、人となられた永遠の神の御子が、罪なき生涯とその死によって、私たち人間が救われるために必要な全てのことを完全に成し遂げてくださったということです。

第一五 救い主の必要

(二) 私は、ほんとうにみじめな人間です。だががこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

新約聖書・ローマ人への手紙 七章二四節

これまで、私たちは人間の罪の問題を考えたきましたが、この聖書の言葉は、イエス・キリストの弟子であった使徒パウロが、自分の罪の深刻な姿に直面して、「私は本当にみじめな人間です」と告白している箇所です。彼は自分のことを「死のからだ」とまで表現しました。そして、自分には自分を救い出さず事が出来ないの、「誰か」が自分を救ってくれなければならぬ、一体「誰が救い出してくれるのか」と叫んでいるのです。これまで考えてきたように、罪の結果がこの様に悲惨なものであれば、確かに人間は、生き物の中で最もみじめな動物と言わなければなりません。すべての生き物は死にます。犬も豚も死ぬでしょう。しかし、その死は、生命の終わりではありません。しかし、人間に関して言えば、それは単なる終わりではないのです。人間は、道徳的に責任があるからです。ですから、死んでしまえば、それで罪が帳消しになると言う事は

ありません。その責任は残っているのです。人間は死んでしまえば、それですべてが終わりとすわけにはいきません。人間の死は、永遠の刑罰に向かう始まりでしかありません。

ここに、私たちの救いの必要性があるのです。聖書が救いと言うとき、それは、罪からの救いを意味しています。決して病気が治ることや、人間の不運をのぞくことや、先祖の霊を払うようなことではありません。私たちは罪の泥沼から救われなければならぬと、聖書は大声で叫んでいるのです。

一体誰が、私たちを救い出すのでしょうか。それが、このパウロの叫びです。興味深いことに、パウロは「何が」私を救い出すのかとは言わず、「誰が」救い出してくれるのか、と言いました。パウロが何か「物体」や「教え」「宗教的修行」に期待していたのであれば、「誰が」とは言わなかつたでしょう。人間を罪から救い出すことは、物や動物や人間の教えには出来ないことです。それは「誰か」でなければなりません。一体、人間を罪と滅びから救い出すのは誰でしょうか。これこそ、使徒パウロの叫びなのです。神は、そのために救い主を与えてくださいました。それが、御子イエス・キリストなのです。

(一) 私とは、この著者であるパウロのこと。彼は深刻な個人的経験を告白している。

第一六 神のひとり子

初めに、ことばがあつた。ことばは神とともにあつた。ことばは神であつた。

ことばは人となつて、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

新約聖書・ヨハネの福音書 一章一、二四節

神は、このような私たちを罪から救うために「イエス・キリスト」を送りました。ここで「ことば」とはイエス・キリストのことです。そのことば（イエス）は、神とともにおり、同時に神そのものでした。ここに、イエス・キリストの神性が明らかにされています。イエス・キリストは神と等しいお方だったので、しかし、そのようなお方が「人となつて」私たちの間に住まわれたのです。先に私たちは神の三位一体を考えましたが、神は位格において三つに分かれています。その第二位格である神の御子・イエス・キリストが、一人の完全な人間となつて私たちの間に来てくださいました。これを書いたヨハネは、弟子として三年余りイエスと寝食をともにしましたが、その彼

が、イエスを「父のみもとから来た（神の）ひとり子」と理解し、その栄光を地上で目撃したと書いています。

確かに、地上におけるイエス・キリストの言動は、単なる宗教のそれとは全く違っていました。偉大な宗教家たちも自分の罪や煩惱に悩み、最後に悟りを開きますが、彼にはそのような形跡は全くありません。彼は、人には罪の悔い改めを説きましたが、自分にはそのような必要を全く覚えませんでした。また主イエスは、「私が道であり、真理であり、いのちなのです。」と主張し、「私を信じる者は死んでも生きるのです。」と約束されました。いまだかつて誰もこのような大胆な主張をした人はいません。主イエスが、ご自分を神と等しい者と自覚していたことは明らかです。

その生涯の終わりに、彼は、十字架に架かり、殺されてしまいました。その十字架の死は、人々の策略によるものでしたが、その実、自らすすんで十字架に架かられたのです。しかし、死んで終わりではありませんでした。彼は三日目に、死を克服して復活しました。これには多くの証拠が残されています。これらの事実は、このお方を神の子として理解する以外にありません。

(一) 永遠のことばであるキリストは、完全な人間となりました。これを「受肉」といいます。

第一七 人となられた神

そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司^(二)となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません^(三)でした。それは民の罪のために、なだめ^(三)がなされるためなのです。

新約聖書・ヘブル人への手紙 二章一七節

イエス・キリストは、永遠の神の御子でしたが、「すべての点で私たち人間と同じように」なりました。同じようになるとは、まさに、神の御子である方が完全にひとりの人間となられたということです。神であるお方が、どのようにして人間になられたでしょうか。神の御子イエス・キリストは、処女マリヤから生まれることによつて、完全な人間性を取つて生まれてきたのです。ただひとつの違いは、彼が罪を犯さなかつたという点です。それを除いては、彼は完全な人間でした。マリヤは普通の赤ちゃんと同じように出産し、彼は普通の子供の成長過程をたどりました。こうして、永遠の神の御子であるイエス・キリストは、完全な神性を持ちつつ、それと混合することなく、

(一) 祭司とは神と人間の間を仲介する働きをする人々です。大祭司はその頂点に立つ人です。

(二) ここでは、人間という意味で「兄弟たち」と言っています。

(三) 「なだめ」の背後には、人間の罪に対して怒っている神の姿がある。

完全な人間性をも持つようになつたのです。これは、確かに人間的な可能性を超えた神の御業です。私たちの理解力を超えたことです。

しかも、ここで人間と同じように「ならなければなりませんでした」という言い方に注目して頂きたいのです。彼には人間となる必要があります。それは罪を犯し、救いを必要としているのが人間だからです。人間が罪を犯したので、人間が罪の償いをしなければならぬのです。ところが、すでに自分で罪を犯している人が、他の人の罪を償うことができないのは当然です。罪は神に対する借金のようなもので、自分自身で借金のある人が、他の人の借金を肩代わりすることができないはずはありません。ですから、罪の償いをするのできるのは、罪を犯したことのないお方だけです。しかし、そのような人はどこにもおりません。ですから神の御子イエス・キリストが罪のない人間とならなければならなかつたのです。これ以外に私たちの罪の問題が解決する道はなかつたのです。イエス・キリストは、私たちの罪によつて引き起こされた神の怒りをなだめるために、人となつて来られたのです。

第一八 そのきよい生涯

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。

新約聖書・コリント人への手紙第二 五章二二節

主イエスはここでは「罪を知らない方」と呼ばれています。もちろん知識としては、罪を知っていましたが、罪を実際に犯されなかつたという意味で罪を（経験的に）知らなかつたといわれているのです。キリストの生涯を記録した福音書が証言しているように、キリストの生涯は、罪の汚点のない完全に聖いものでした。三年間寝食を共にした弟子達は、異口同音に彼の完璧な姿を証言しています。ペテロは「キリストは、罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。」と彼の道徳的完全性をたたえています。ヘブル書の著者は、「私たちの大祭司（イエス）は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」と述べています。主イエスは社会の底辺にいた人々、当時の社会から罪人と呼ばれていた人々と常に接点を持っていましたが、それに染まることはありませんでした。

神はそのように「罪を知らない方」を私たちの罪の身代わりにして、イエス・キリストに私たちの罪の責任を負わせ、キリ

ストを十字架の上でさばかれたのです。罪の身代わりになることが出来るのは、罪のない者だけです。そのお方だけが、私たちの罪の身代わりになることが出来るのです。こうして、神は、私たちの罪の責任をイエス・キリストに負わせ、このお方の正しさを私たちに与え、私たちを「神の義」（神の前に罪のない正しい人間）としてくださったのです。

私たちの罪をキリストに転嫁し、キリストの罪なき義を私たちに転嫁したのです。それは、ちようと赤字になっている預金通帳と比べることが出来ます。キリストのあり余つた財（彼の義）を持って、神は私たちの借金（私たちの罪の責任）を肩代わりしてくださったのです。罪という債権者に追いまぐらわれているような私たちの口座に、キリストの富（義）を振り込んでくださったのです。こうして、私たちは、返済の義務から解放されたのです。これが、私たちの罪を赦す神のご計画でした。私たちの罪からの救いはここにあります。このようにして、神は私たちを、その罪と滅びから救い出してくださいました。

第一九 十字架の死によって

〔三〕 彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、

私たちの咎のために砕かれた。

彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、

彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

旧約聖書・イザヤ書 五三章五節

このイザヤ書は、キリストが誕生する約七百年も前に書かれましたが、すでにキリストが十字架に架けられて死ぬことを生々しく預言しています。しかし、もつと大切なことは、彼の死の意味が語られていることです。彼は、私たちの罪のために、私たちの身代わりとして刺し通され、それによって私たちに平安がもたらされるといふのです。

私たちは先に人間の最大の問題として、罪のことを考えました。救いとは罪から救われることですが、罪はどのように解決することができるでしょうか。罪の解決のために必要なことは罪に対して十分な刑罰が加えられることです。これはすべての人々に共通した考え方です。私たちがひとりひとりが、自分の罪の責任を取り、神からの永遠の刑罰に服すればそれで良いの

です。しかし、それでは救いがありません。ところが、聖書は、ある条件の下では刑罰というのは身代わりに受けることが出来るかと教えています。その条件とは、もし罪のない完全な人がいれば、ということです。その時、その罪なき人が私たちの罪の身代わりになる事ができるのです。それがイエス・キリストでした。

彼は、私たちの身代わりに刑罰を受けて死んだのです。ここで「彼は、刺し通され、砕かれた」というのは、イエス・キリストの十字架での苦しみを描いています。そのような苦しみは、「私たちの罪の（身代わりの）ため」であつたのです。つまり、私たちの罪をその身に負うためでした。罪からもたらされた刑罰をキリストは身代わりに受けて下さつたのです。その結果、私たちに「平安といやし」がもたらされました。その「平安」というのは、神との平和のことです。神は正しいお方であつて、私たちが罪人のまま受け入れる事は出来ません。そこで、御子イエスによって神自ら罪の問題を解決して、私たちが受け入れて下さつたのです。ここに神との平和、神との和解が実現しました。

(一) イエス・キリストのこと。

(二) キリストの十字架上での苦しみは、罪に対する刑罰としての「懲らしめ」であつた。

第二〇 死からの復活によつて

私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであつて、次のことです。キリストは、聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書の示すとおり、三日目によみがえられたこと、また、ケバに現れ、それから十二弟子に現れたこと、その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現れました。その中の大多数の者は今なお生き残っていますが、すでに眠つた者もいくらかいます。

新約聖書・コリント人への手紙第一 一五章三六節

主イエスは、私たちの罪のために十字架に架かつて死なれただけではありません。聖書は、彼が死んだ後、三日目に復活したことを語っています。復活の証拠はイエス・キリストの復活を証言している証人たちです。主イエスはまずケバ（ペテロ）に現れました。彼は主イエスの一番弟子で、イエスのそば近くを歩んだ人です。それから勿論他の弟子たちにも現れました。五百人以上の人々に一度に現れたこともあり、その人々は、この「コリント人への手紙」が書かれた紀元五十年頃にはまだ大勢生き残っていました。彼らの証言が嘘ではないことは、彼ら

がその復活を最初から宣べ伝え、それゆえに殉教したことからわかります。復活の証言を取り消すくらいなら、彼らは喜んで死を選んだのです。

勿論、こんなことを単純に信じることは出来ないと言う人々もいます。そこで復活を別な方法で説明しようと思いましたが、しかし、誰一人納得のいく説明をした人はいません。しかも、これだけは全ての歴史家も否定できません。すなわち、主イエスの死後直ちに、イエス・キリストの復活を信じる一群の人々が突然エルサレムに出現し、最初のキリスト教会が建てられたことです。彼らは最初から復活を述べ伝え、その教えは瞬く間にローマ帝国に広まったということです。この「コリント人への手紙」は、紀元五十年頃に書かれたが、このことも、主イエスの死後（紀元三十年）、わずか二十年後には復活を信じるクリスチャンたちがすでに古代ギリシャの大都市コリントにいたことを示しています。私たちは、復活によつて、主イエスが死に勝利したことを知ることが出来ます。そればかりか、私たちは復活によつて、主イエスが確かに救い主であることを確信することが出来るのです。

(一) キリストの死も復活も旧約聖書にすでに預言されていました。

第二一 完全な救い

したがって、ご自分^(一)によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなし^(二)をしておられるからです。

新約聖書・ヘブル人への手紙 七章二五節

イエス・キリストは、私たちが完全に救うことができます。なぜなら、第一に、私たちが救われるに必要な全ての条件を完全に満たしたからです。まず、キリストはその聖い生涯によって神の求める律法の要求を完全に満たしました。そして、その生涯の最後に、私たちの罪のためにご自分を十字架の上で神にいけにえとして捧げられました。その十字架の死は、非常に独特な死でした。人間の罪によって引き起こされた神の怒りの全てが、その上に襲いかかったからです。あまりの恐ろしさの故にキリストは、十字架上で「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか。」と叫ばれたほどです。しかし、彼が神の怒りを引き受けてくださったことによって、神の怒りがおさまったのです。罪なき神の御子が十字架の苦しみをしのび、死なれたことは、地上の全ての罪人が神からの刑罰を永遠に受

けるよりも、遙かに大きな苦しみでした。こうしてキリストの苦しみは、永遠の滅びから私たちを救い出したのです。

キリストが完全に私たちを救うことができるのにはもう一つ理由があります。それは、彼が今も天において、いつも父なる神の御前に私たちのためにとりなしをしていてくださるからです。キリストは十字架の上で死なれましたが、それは終わりでありませんでした。むしろキリストの救いの御業のほんの初めでした。彼は、死後三日目に墓の中から復活し、四十日間弟子たちと共に歩まれた後、皆の見ている前で昇天しました。昇天とは、上空に上って行ったということではありません。キリストが神としての本来のあり方に戻ったということです。もはや、地上で人間として生きた時のような生き方はされなくなつたということです。キリストは今も生きており、神の御子として神の右に座し、神の御前で私たちのためにとりなしをしてくるのです。

(一) イエス・キリストのこと。

(二) 私たちのこと。私たちはキリストによって神に近づくことができます。

(三) キリストは、神の御前で私たちの側に立って弁護者として働いてくださる。

教会のシンボル

今でこそ教会のシンボルは十字架になりましたが、その昔、教会のシンボルは魚マークでした。魚は、ギリシャ語でイクトゥス (ΙΧΘΥΣ) と言います。そして「イエス、キリスト、神の御子、救い主」の頭文字を集めると「イクトゥス」のつづりになるのです。そこから人々は教会の印として魚を用いたのです。当時の人々がどのように主イエスを理解したかがよく分かります。

Ἰησοῦς —— イエス

Χριστός —— キリスト

Θεοῦ —— 神の

Υἱός —— 子

Σωτήρ —— 救い主

第四章 救いについて

第四章では、私たちの救いと信仰についての七つの言葉を考
えます。これらのみことばは、私たちの救いと信仰について何
を語っているでしょうか。

それは、私たちが、自分の罪を悔い改め、生ける神に立ち返
り、ただイエス・キリストの救いの御業を受け入れることによつ
て罪が赦され、救われるということです。救われた者は、神の
みことばと祈りとによつて神の御心を行なうために歩んで行き
ます。

第二二 悔い改め

ペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物たまものとして聖霊二を受けらるでしょう。

新約聖書・使徒の働き 二章三八節

この聖書の言葉は、主イエスが復活して、五十日後にエルサレムに最初の教会が建てられた時、ペテロが人々に語った説教です。ペテロは救いを受けるために、最初にすべきことは「悔い改め」であることを明らかにしました。主イエスの宣教の場合も同様で、主イエスは、教え始められた時、最初に「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」と言われました。このように、救いを受けるためには、まず悔い改めが必要です。

悔い改めとは、私たちの心が百八十度の転換をすることです。何よりも神を無視していた方から神を信じる方へと方向転換することです。それは心の中心に神を据えて、神を中心として生きることです。同時に、悔い改めとは自分の行いに関しても罪を認めることを含んでいます。私たちは、神を無視してきた結

(一) ここでは救いの約束と同時に、聖霊を受ける約束が与えられています。聖霊は、悔い改めや救いの経験を分離しているのではなく、むしろ救いのためになくことの出来ないものとして約束されている。

果、人に対しても罪を犯して来たからです。罪人であることを率直に認めなければなりません。罪の状況は個人によって様々でしょう。しかし、これまで犯してきた罪を覚えてる限り全て神の前に告白することは良いことです。また悔い改めには、罪を犯してきたゆえの悔いと悲しみとが伴うでしょう。さらに、再びそのような罪を犯さなくなるように、罪を捨てる決心をすることが含まれるでしょう。そのような認罪による悔い改めは、私たちの心に聖霊が働いた結果です。そのようなとき、聖霊は私たちが意識しなくても、私たちの内に働いているのです。その聖霊の働きに逆らわないで、この世の悪を離れて主の道に立ち返りましょう。悔い改めは、私たちが救いを受ける時、最初に現れてくる外的しるしです。

ただし、悔い改めは、信仰の初めに一度だけすることではありません。主イエスは「罪を」悲しむ者は幸いです。」と言いました。私たちは救われていても、完全にされているのではなく、この悔い改めは生涯続いて行くことでもあります。

第二三 信仰によって

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができません。ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、^{あた}義と認められるのです。……人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。

新約聖書・ローマ人への手紙 三章二三、二八節

罪を悔い改めるだけでは、救いに到達しません。それはむしろ救いを受けるための準備です。罪を深く悔い改めることは、同時に救いへの強い願いを私たちの内に引き起こすはずですが、そこに、悔い改めと同時に、主イエスを救い主として信じる信仰が与えられます。この聖書の言葉は、どのようにしたら、主イエスの救いが私たちのものとなるかをよく説明しています。第一に、それは「神の恵みによる」ことです。救われるに値しない者に、神が気前よく与えてくださるもので、恵み以外の何者でもありません。

第二に「価なしに義と認められる」と約束しています。「価なしに」とは、無料でということ、宗教的修行や道徳的鍛錬、ましてやお布施や献金によるのではないということです。勿論、その背後に「イエス・キリストの贖いの御業」があつたからです。それ故、救いは今や無料です。

無料であれば、私たちは何もしなくて良いのでしょうか。いえ、無料で提供されていても、一つのことが必要です。それは、受け取ることです。それを「信仰」と言うのです。信仰とは「受け取ること」です。神から与えられたイエス・キリストの救いを、プレゼントを受け取るように受け入れる時、私たちはその救いにあずかることが出来るのです。神が約束してくださったことに、ただ単純に信頼することによって、その救いを受けることが出来るのです。

ですから、人間は律法の「行い」によって救われるのではなく、信仰によって救われるのです。人間は「行い」で救われるほど立派ではないし、その能力もありません。自分の努力で自分を救ったというのは、結局は自己満足であつて、誰も自分の罪を神が満足するほどには、償うことは出来ないのです。大事なことは、「私も主イエスを信じます。主イエスが私の罪の贖いとなり、復活となつてくださったことを信じます。」と素直に神に告白することです。その時救いはその人のものとなるのです。

第二四 新しく生まれること

イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」ニコデモは言った。「人は、老年になつていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎に入つて生まれることができましようか。」ニコデモは言った。「人は、老年になつていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎に入つて生まれることができましようか。」

新約聖書・ヨハネの福音書 三章三十五節

この聖書の言葉は、ニコデモと主イエス・キリストとの対話です。ニコデモは自分が死んだ後、どうなるのか分からず心配でした。彼の心を見抜いた主イエスは、救いのために必要なことは新しく生まれることである、と明確に伝えました。

私たちが罪を認め悔い改めること、主イエスを信じ受け入れることは、私たちが救われるためになくてはならないことです。同時にそれだけではまだ不十分です。キリストの十字架に

よつて罪からきよめられても、再び罪を犯すようになるからです。私たちには、これまでの罪との関係を絶つただけではなく、今後、罪に打ち勝つことが必要です。そのような救いの側面は「新生」と言われています。

新しく生まれることはどのように出来るでしょうか。人間には、母の胎に戻つて再び生まれることは出来ません。主イエスは、人が新しく生まれるのは「御霊によつて」であると言われました。つまり、聖霊が、私たちの心の中に新しいのちを植え付けてくださるのです。このことを不思議に思うことはありません。なぜなら、現在の肉の生命も、私たちはそれがどこから来たのかを知りません。ただ心臓が動いて、生命が実際に働いているので、生命があることがわかります。同様に、神は信じる者の心に新しいのちを与えてくださるのです。そのことも新しいのちが活動している事によつてわかるのです。つまり、罪を悔い改め、信じ、聖書を読み、祈つたりするのは、すでに新しいのちが働いているからです。この新しいのちによつて、私たちは古い自分に死に、罪に打ち勝ち、義に生きるのです。

(一) 神の国とは天国のこと。

(二) 彼はユダヤ人の教師と呼ばれていて、当時ユダヤ社会で高い地位にいた人物。これは彼が夜にイエス・キリストを訪ねて、救いについて尋ねたときの話である。

第二五 信じる決心をすること

看守は「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか」と言った。ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と言った。

新約聖書・使徒の働き 十六章二九―三二節

主イエスの救いを自分のものとするために、もつと具体的に話したいと思います。それは、もしまだ信じていないのであれば、信じる決断をする（もつと正確には、信じたことを表明する）必要性についてです。この聖書箇所は、パウロとシラスという二人の弟子たちが、イエス・キリストを述べ伝えたために投獄されていた時、その看守との間に交わされた会話です。看守は「救われるために何をしなければなりませんか」と二人に尋ねました。その時パウロは、「主イエスを信じなさい、そうすればあなたもあなたの家族も救われます。」と答えました。救われるためには、信じなければなりません。

私たちは先に、信仰について考えました。私たちが救われるのは、行いによつてではなく、信仰によつてです。では信仰とは何でしょうか。信仰とは、二つの要素からなっています。そ

れは、知識と信頼です。私たちはまず知識として、イエス・キリストの救いを知らなければなりません。イエス・キリストの十字架と復活のもたらした救いの事実を聞き、知識を得る必要があります。これは全ての信仰の基礎です。しかし、知つただけでは信仰にはなりません。次に、その知識に実際に信頼することが必要です。そのとき、私たちは信仰を持つたと言ふことになります。

このように、信仰とは知識を信頼という行為へ変えることです。知識から信頼への変化はどのように起こるでしょうか。それは、多くの場合、信じる決心をすることによつてです。自分が信じていることを公けに告白することによつてです。勿論、知識から信仰への移行は、人によつていろいろなケースがあるでしょう。改めて決断をしなくても、すでに信じているという方もいます。子供の頃から教会に行つていたために、知識から信頼への移行がいつであつたかわからない場合もあるでしょう。大事なことは、信じていることを神と人の前に、告白することです。

(一) この時、パウロは投獄されていた。

(二) パウロとシラスのこと。

第二六 みことば

ですから、あなたがたは、すべての悪意、すべてのごまかし、いろいろな偽善やねたみ、すべての悪口を捨てて、生まれたばかりの乳飲み子のように、純粹な、みことば(2)の乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。

新約聖書・ペテロの手紙第一 二章一―二節

罪を悔い改め、救いを受け入れた後、クリスチャンとしてどのように歩んでいけば良いのでしょうか。聖書は私たちに二つの信仰の「手段」を教えています。それは、聖書と祈りです。この箇所は、私たちがクリスチャンとして歩んでいくために、なにより聖書のみことばが必要であることを語っています。ですから私たちに「みことばの乳を慕い求めなさい」と命じているのです。

こどもを育てたことのある親ならば、誰でも「生まれたばかりの乳飲み子」がどれほど乳を慕い求めるかを知っています。赤ちゃんは、一生懸命に、ひたすら乳を飲み続けます。そこに赤ちゃんのいのちがかかっているからです。そのように、私たちもみことばという「乳」を慕い求めるべきなのです。それがクリスチャンとして生きるために不可欠なことです。そうする

ことで、私たちは神のみこころを知り、神に従って生きることが出来るからです。それは、まず第一に教会の礼拝に出席し、そこで語られる説教に耳を傾けることです。礼拝で語られる説教（メッセージ）は、神からの語りかけです。それと同時に、私たちは、自分でもまた規則正しく聖書を読むことが出来ます。

赤ちゃんにとつては、乳を飲むことは、そのまま成長を意味します。私たちが聖書を読む目的も同じです。その目的とは「それ（みことば）によって、成長し、救いを得るためです。」「救いを得る」というと、私たちは救われていないのかと考えてしまいかも知れません。しかし、ここはそういう意味ではありません。私たちは救われていますが、その救いはまだ完成されておらず、私たちは、最終的な救いの完成に向かって成長していくのです。その成長のためには、どうしても聖書のみことばに養われていく必要があるのです。それは神に聞く生き方です。ルターは、クリスチャンは耳で生きると言いましたが、その意味は、クリスチャンの全生涯が神のみことばに聞き続ける生涯であるということです。

(一) 聖書の言葉のこと。

第二七 祈り

何も思い煩わづらわないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願ねがいによって、あなたがたの願ねがい事を神に知っていた大きなさい。

新約聖書・ピリピ人への手紙 四章六節

私たちに与えられたもう一つの恵みの手段は「祈り」です。聖書のみことばは、私たちが神から聞く手段であるのに対して、祈りは私たちが神に語る手段です。こうして、聖書から神の御声を聞き、祈りによって神に語ることによって、私たちは神との人格的な交わりの中を生きるのです。祈りが「神との会話」と呼ばれるのはそのためです。右の聖書箇所は、私達があらゆる時に、神に私達の願いを申し上げ、私達の願いを知っていたことが祈りであると教えています。ただし、その願ねがいは神のみどころになかったことではなければなりません。ですから「祈りとは、神のみどころに一致する事のために、私たちの罪の告白と神のあわれみへの感謝を添えて、神に私たちの願ねがいをささげることです。」と定義されます。

ではどのような願ねがいが神のみどころになつているのでしょうか。主イエスは祈りの見本として「主の祈り」を教えました。が、その中で六つの願ねがいをささげるように教えました。

◆まず最初に「天にいます私たちの父よ」と呼びかけるよう

に教えました。これは私たちが、神に対して子どもとしての信頼を持つて祈ることです。◆第一の願ねがいは「御名があがめられますように」です。これは神の栄光が人々に認められ、あがめますようにという願ねがいです。◆第二は「御国が来ますように」です。これは、神が私たちの心を支配し、その支配がいよいよ広がって行きますようにという願ねがいです。◆第三は「みどころが天で行われるように地でも行われますように」です。これは、私たちが神の御心を行い、罪の欲望に従わないようにという願ねがいです。◆第四は「私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください」です。これは、食物や衣服に限らず私たちが地上で生きるに必要な全てを与えてくださるようという願ねがいです。◆第五は「私たちの負いめをお赦してください」です。これは、私たちに罪の赦しを与えられ、神との平和の中を生きることが出来ますようにという願ねがいです。◆最後は「私たちを試みにあわせしないで、悪からお救いください」です。これは、神の力によってあらゆる罪の誘惑に打ち勝つことが出来ますようにという願ねがいです。

祈りは、神との交わりです。あなたがすでに自分が罪人であることを認め、イエス・キリストの救いを信じているのならば、あなたは神の子です。遠慮はいりません。さあ「天のお父さま」と祈り始めましょう。神はあなたの祈りを待っています。

第二八 教会

そこで、彼(二)のことはを受け入れた者は、バプテスマ(三)を受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。

新約聖書・使徒の働き 二章四一―四二節

主イエスが復活して、わずか五十日後にエルサレムに最初のキリスト教会が誕生しました。その時の様子は、新約聖書の「使徒の働き」に詳しく記されています。このみことばは、集まってきた群衆に対してペテロがイエス・キリストの救いを語り、人々がそれを受け入れたときのことを書いています。この時、三千人の人々が、ペテロの言葉に心を刺されて、悔い改め、洗礼を受けて、教会の会員として加えられました。これが教会の出発点でした。この時以来、教会は全世界に拡大していったのです。

教会が誕生した後、最初のクリスチャン達は教会に集い何をしたのでしょうか。ここに最初の教会の様子が描かれています。

(一) 彼とはペテロのこと。ペテロの語った説教に対する人々の応答が記されている。

(二) バプテスマは洗礼のこと。

(三) 使徒とはイエス・キリストの弟子のこと。

彼らは「使徒たちの教え」を堅く守りました。「使徒たちの教え」とは「新約聖書」のことです。新約聖書は使徒たちによって書かれました。そこに聖書の中心的な教えがあります。その聖書を学んだのです。次に彼らは「交わり」を持ちました。そこには愛による具体的な助け合いがあったのです。次に「パンを裂いた」とありますが、これは今日の教会でも続けられている聖餐式のことです。それは、主イエス・キリストが十字架につく直前に弟子達に行うように命じたもので、パンとぶどう酒（あるいはぶどう液）を用いて主イエスの十字架の救いを覚えることです。最後に、彼らとともに「祈り」しました。以上の四つのことは今日に至るまで教会の中心的な活動です。

神は、クリスチャンが孤独に生きることを願いません。むしろ全てのクリスチャンが、教会の中で神の家族の一員として、互いに兄弟姉妹として、愛の交わりをもって生きることを意図されました。勿論教会も完全ではありません。救われたクリスチャンであつてもなお罪人であつて、不完全だからです。しかし、神様はこの教会を通してご自身の働きを進めて行きます。教会は、神のご計画に具体的に仕えているのです。ですから、教会の働きに参加することは神への奉仕の働きです。

信じる決心の祈り

聖書の福音を聞き、信じたいと思われた方は神の御前に、次のように祈りましょう。「天の父なる神様。私はイエス・キリストの救いの福音を知り、イエス様が神の御子であり、私の救い主であることを信じます。また私がこれまで思いと言葉と行いにおいて罪を犯してきたことを認め、悔い改めます。イエス様が、私の罪の身代わりとなって十字架にかかれ、私に罪の赦しを与えてくださったことを感謝いたします。これからは、イエス様に従って歩むことができますように導いてください。イエス様の御名によって祈ります。アーメン」これであなたもクリスチャンです。その決心を必ず教会に告げましょう。

第五章 永遠の望みについて

最後の第五章では、私たちの最終的狀態についての四つの言葉を考えます。それらは、私たちの最終的な、永遠の狀態について何を語っているでしょうか。

それは、まず主イエス・キリストが再び来られて、全ての人が死からよみがえらされることです。それに続いて、それぞれの行ないに応じてさばきが行われ、「永遠の刑罰」にはいる人々と、「永遠のいのち」にはいる人々とに分離されます。永遠のいのちにはいる人々は、新しい天と新しい地を受け継ぎ、永遠に神と共に住み続けます。

第二九 主イエスの再臨

ただし、その日^(一)、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも知りません。ただ父だけが知っておられます。人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。洪水前の日々は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとつたり、とついでりしていました。そして、洪水が来てすべての物をさらってしまいうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。

新約聖書・マタイの福音書 二四章三六―三九節

イエス・キリストは、この地上を去る前に、ご自分が再び来ることを繰り返し明言しました。この聖書箇所はその一つです。しかし、その時がいつになるのかは、決して語られませんでした。それは父なる神以外、誰も知らないと言われたのです。しかし、その時は、私たちには意外と思われる時に、突然やってくることを強調し、そのために私たちが絶えず備えている重要性を語られたのです。

ノアの洪水の時代、人々は洪水で滅びることなど想像すら出来ませんでした。そこで、人々は神を無視し、食べたり

飲んだりして、その日その日を暮らしていたのです。しかし、大洪水による滅びが突然彼らを襲いました。主イエスの再来(それを「再臨」と呼ぶ)もそれとよく似た状況になることを予告しました。キリスト教から派生した諸宗教や異端は、しばしば、この再臨の時がいつになるかを特定しようとします。しかし、再臨の日を定めようとする全ての試みは、イエス・キリストの明白な教えに反することです。

また、主イエスは、輝かしい栄光を帯びて、全ての御使い達を従えて再び来られると言われました。それは、イエス・キリストが最初に地上に來られたときと、何と違うことでしょうか。最初のクリスマスMASの日、主イエスは片田舎のベツレヘムで人々に知られず、ひっそりと誕生しました。しかし、二度目の來臨の時は、全ての人々が見逃すことにはない形で來られます。今日、人類の破滅を予測させる多くのデータがあります。人類がいつまでも続かないことが明らかになりました。この世界はやがて終わりを迎えるのです。人類が終わりを迎える時、その最初のステップとして起きるのが、イエス・キリストの再臨です。

(一) イエス・キリストが再び来る日のこと。

(二) 主イエスは、自分を指すのに「人の子」と言う呼び方を用いました。それは救い主の称号です。

第三〇 よみがえり

けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエスがキリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

新約聖書・ペリピン人への手紙 三章二〇―二二節

イエス・キリストが、地上に再び来られる目的は二つあります。一つは「復活」のため、もう一つは「さばき」のためです。この聖書箇所は、主イエス・キリストが再び来られる時、私たちの「卑しいからだ」を「栄光のからだ」に変えてくださることを約束しています。私たちの現在のからだは「卑しいからだ」と呼ばれるのは、この地上に生きている間、このからだは罪のために利用されてきたからです。そればかりか、多くの病いを経験し、苦しみや悲しみを味わい、地上で七・八十年間使用され、朽ち果てていくからです。それは私たちがこの地上で一時的に生きるために与えられたものでした。しかし、そのような「卑しいからだ」を「栄光のからだ」へと変えてくださるのです。そのような変化は「復活」を通して来ます。

クリスチャンは、死を終わりとは考えていません。イエス・キリストは復活して、人類最後の敵である死を征服したからで

す。同様に、キリストを信じている私たちも肉体を持って復活します。それこそクリスチャンの希望と確信です。人が死ぬと、私たちの肉体と魂とは分離し、肉体は朽ち果てます。多くの場合、火葬に付されて墓地に納骨されます。こうして卑しいからだは滅びるのです。人間の魂は、消滅することはありません。主イエスが再臨される時、私たちの魂に新しいからだを与えて、私たちが復活させるのです。

キリストの救いを信じなかった人々が、どのように復活するかについて詳しいことは分かりません。しかし、キリストを信じていた人々の復活のからだは、もはや朽ちることのない、「栄光のからだ」であることが約束されています。この地上にも、鳥や獣や魚がそれぞれの「肉」を持っているように、それと同様に、現在の肉体とは違った、別な「からだ」を神は与えてくださるのです。その最初の実例としてイエス・キリストは肉体を持って復活されたのです。キリストの復活の確かさが、私たちの復活の保証です。もし、復活がなく、キリストに単なる希望を置いていただけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者ですが、キリストは眠った者の初穂として確かに復活されました。

第二一 さばき

「人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、羊を自分の右に、山羊を左に置きます。そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。』……それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ。』……こうして、この人たちは永遠の刑罰に入り、正しい人たちは永遠のいのちに入るので。」

新約聖書・マタイの福音書 二五章三一―四六節

主イエスが再び来られるもう一つの目的は、最終的な「さばき」を行うことです。主イエスは再臨し、全てのの人々を右と左に分類されます。右側には正しい人々を集め、永遠のいのちを与え、神の御国を相続させます。また反対の左側には、神に従わなかった人々を集め、彼らには永遠の刑罰を与えられるのです。その中間に立つ人は誰もいません。

このようなさばきは必然的なものです。なぜなら、もし人間が死に、肉体も魂も消滅して、全てが終わるならば、これほど

不公平なことはありません。正義のために生きた者も、悪のために生きた者も、死んでしまえば全ては同じであると言うことは全く不公平です。神は正しいお方として、そのような人間の道徳的な責任を未解決のままに残すようなことは出来ないのです。正義の神がおられるのであれば、さばきは必然です。

このさばきの規準となるのは神の規準です。地上で警察に捕まらずに過ごしてきたと言うだけでは十分とは言えません。最終的にはイエス・キリストのみことばに従ったかどうかが規準となります。さらに、神は私たちの外面の行為だけではなく、これまで心の中に隠されてきたことまでがさばきの対象になります。

しかし、このようなさばきの時とは、イエス・キリストを信じてきた者にとつて、信仰の誠実な歩みが初めて十分に報いられるときです。信じてきた人々は、その行いに応じて神様から豊かな報いを受けることになるのです。

第三二 新しい天と新しい地

「また私は、新しい天と新しい地を見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。……そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってください。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

新約聖書・ヨハネの黙示録 二二章一―四節

さばきに続いて、すべては最終的な、永遠の状態へと移行していきます。ここにおいて、神が計画された全ての御業は最終的な目的地に到達します。神は、新しい天と新しい地を再創造し、そこにイエス・キリストによって救われた人々を導き入れ、こうして「神の国」あるいは「天の御国」が完成されるのです。そこにはもはや死もなく、悲しみもなく、苦しみもありません。神は私たちの全ての涙をぬぐい取ってくださいのです。「悲しむ者は幸いです。」と言われた主イエスの約束が実現する

のです。なぜなら、「以前のもの」すなわち罪と死と苦悩に満ちた古い世界が過ぎ去り、全てが新しくなるからです。神の国におけるもつとも大きな祝福は、神の住まいが人とともにあって、神が私たちとともに住んでいてくださることです。そこには何の妨げもない、神との直接的な交わりが全ての人に与えられています。それは救いのゴールでした。また神が直接人ともにおられることの祝福は、ヨハネの黙示録の中で次のように描写されています。「もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらぬ。彼らは永遠に王である。」(新約聖書・ヨハネの黙示録 二二章五節)

新しい天と新しい地が、現在の宇宙を再生することなのか、あるいは、全く別な天地を創造するのか分かりません。また私たちは天国の栄光について多くを知らされているわけではありません。ただ、それは、私たちの地上の生活の単なる延長ではなく、全てが新しくなるのです。それは想像を絶した栄光でしょう。こうして、神と永遠の交わりの中に生きることになります。ハレルヤ。

(一) 著者ヨハネのこと。

(二) 現在の天と地のこと。

終末

私たちの住んでいる地球に終わりがあるということは、しばらく前までは、SFの題材でしかありませんでした。しかし、今や各種の統計が地球の限界を証明しています。迫り来るエネルギーの枯渇、環境の悪化、人口爆発と食糧危機、抑制できなくなった巨大科学技術や遺伝子技術、新たなる病気の出現。聖書が三千年前から預言している世界の終わりは、もはやSFの中に閉じこめておくことが出来なくなっています。

第二部 慰め励ます聖書の言葉

◆病床にあるとき

私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。……このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。」というのには、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

新約聖書・コリント人への手紙第二 一二章七 九節

この聖書の言葉は、パウロが病の中で語った言葉です。彼は肉体に一つのとげを持っていました。それは不治の病だったようです。彼はそのいやしを求めて祈りました。しかし、祈っても祈っても、祈りは聞かれず、病はいやされませんでした。しかし、病との闘いの中で、彼はさらにすばらしい事実に見覚えがいきます。それは、病の中にあつても神の恵みは十分であるということでした。あるいは彼は病気のゆえに、神の愛に疑問を抱いていたのかも知れません。しかし、神の恵みは十分であることを知りました。そればかりか、彼は病気という弱さの中で神の強さを経験することを知りました。キリストの力が自分を覆ってくださることを知りました。そこで、もはやいやしのために祈るばかりではなく、積極的にその弱さの中に生き、弱

さを誇るように変えられたのです。

◆病いの理由に苦しむとき

またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。」

新約聖書・ヨハネの福音書 九章一―三節

不治の病を負って生まれてくる人々を見ると、その不幸を前世の業や、運命や、先祖の罪に結びつけて考える人々がいいます。しかし、主イエスは、そのような考え方を全く否定されました。むしろその病は、神の栄光が現れるためである、と積極的に肯定されたのです。確かに、病を負いながら、病いによって多くの働きをした人々がいいます。彼らは、病気を神の栄光が現れる場所へと変えたのです。キリストを知ることによって、悲観的な病も、神の栄光の現れる場所へと変えられるのです。

◆疲れを覚えるとき

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

新約聖書・マタイの福音書 一一章 二八―三〇節

この言葉は、イエス・キリストによつて語られました。彼は「私のところへ来なさい」と私たちを招いています。そして「あなた方を休ませる」と約束されました。それは何と偉大な招きでしょうか。確かにイエス・キリストを知るとき、私たちはこの休息を経験することが出来ます。それはこの世の与える休息とは違う、自分が願っていた休息とも違う、それらをはるかに超えた神の永遠の安息です。それは、キリストの救いを知る中にあります。

◆心配事に悩むとき

空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養っていてくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。あなたがたのうちだが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。……だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。

新約聖書・マタイの福音書 六章 二六―二七、三四節

心配や思い煩いは、生涯私たちから離れることは無いかも知れません。しかしこの聖書の言葉は、思い煩いが無駄な努力であることに気づかせてくれます。思い煩いとは、将来に属する事柄のことであり、それゆえ自分ではどうすることもできないのです。ですから、今日一日のことに全力を注ぐ方がずっと、良いのです。そして、空を飛ぶ鳥から、そのことを学び取るように主イエスは教えました。鳥は無力な動物ですが、そこには神の確かな「養い」があります。真の神を知り、信頼することが心配からの最終的な解決です。

❖ 思い煩いに心沈むとき

何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願いを神に知っていた大きなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあつて守つてくれます。

新約聖書・ペリピ人への手紙 四章六―七節

「心配」とは心を配ると書きます。心配は、確かに私たちの心をちりぢりにします。思い悩みは結論のない堂々巡りのようなものです。このような場合、最善の方法は、神に祈ることでしょう。神はあなたの重荷を負つてくださいます。神はあなたの将来を知つてくださいます。神は私たちを最善へ導こうとしています。神はその証として御子を与えてくださいました。さあ「天にいます父よ。」と神の前に心を注ぎだして祈りましょう。そうすれば、神の平安を経験することでしょう。

❖ 死を恐れるとき

わたしは、天から下つて来た生けるパンです。だれでもこの

パンを食べるなら、永遠に生きます。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。

新約聖書・ヨハネの福音書 六章五一節

あるフランスの詩人は、人間がじつと見つめることが出来ないものが二つある、それは太陽と死であると言いました。確かに、死は人間がじつと見つめることのできないものです。私たちは誰も死に打ち勝つことは出来ないことを知っているからです。死を考えると、現在の人生がどのような意義を持っているのか分からなくなります。それ故に、私たちは死を恐れ、その問題を避けて、考えないようにつとめるのです。しかし、また死ほど確実に私たちが経験するものはありません。私たちは、百パーセント死に直面するのです。死を見つめることが出来るのは、私たちが永遠の命についての望みを持つときです。主イエスはそのために来てくださいました。古代からクリスチャンたちは絶えず迫害され死の危機にさらされてきましたが、彼らはそのような中で輝くことができました。それは死が救い主によって克服され、復活の望みを持っていたからです。復活の望みによってだけ、私たちは死に対する勝利を得ることが出来ます。

◆ 困難に直面しているとき

私は山に向かつて目を上げる。

私の助けは、どこから来るのだろうか。

私の助けは、天地を造られた主から来る。

主はあなたの足をよろけさせず、

あなたを守る方は、まどろむこともない。

見よ。イスラエルを守る方は、

まどろむこともなく、眠ることもない。

主は、あなたを守る方。

主は、あなたの右の手をおおう陰。

昼も、日が、あなたを打つことがなく、

夜も、月が、あなたを打つことはない。

主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、

あなたのいのちを守られる。

主は、あなたを、行くにも帰るにも、

今よりとこしえまでも守られる。

旧約聖書・詩篇 一二二篇

苦しいとき、助けが必要なとき、この詩人は山を見上げると

言います。しかし、山が彼を助けてくれるわけではありません。

この詩人は、山を造った神を見上げ、「私の助けは天地を造ら

れた神から来る」と告白しています。私たちもこの神が、私たちの日々の歩みに関心を持ち、私たちをまどろむこともなく守り続けていることを思い出しましょう。あらゆる困難の中で、私たちは神に頼ることができのです。勿論そのようなことは、弱い人のすること、神は自分には必要ないと考える人もいます。しかし、私たちは自力でどうすることもできない困難も多くあることを知っています。自分の強さの限界を認めることによって、私たちは神に向かつて行くのです。それは、真に強い人ができることです。

◆ 励ましが必要なとき

では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちがすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。

新約聖書・ローマ人への手紙 八章三一―三三節

神は私たちの味方です。天地万物を創造された神が、私たちの味方であれば、私たちに向かつてくる災難や不運を恐れるこ

とはもはやありません。励ましは、神が私たちの味方であることを確信することによってもたらされます。では神が私たちの味方であることをどこで知ることが出来るでしょうか。それは、イエス・キリストの十字架によって示された神の愛を知ることです。神は、罪人である私たちを救うため、実にそのひとり子であるイエス・キリストを十字架にかけ、その贖いによって私たちを救って下さいました。このように神は、私たちを救うために、「ご自分のひとり子をさえ惜しまずと与えて下さいました。ですから神は私たちの味方です。」

◆理由の分からない困難に直面しているとき

あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。

旧約聖書・創世記 五〇章二〇節

その昔イスラエルにヨセフという人物がおりました。その生涯の前半は実に惨めな生活でした。彼は兄弟たちに裏切られ、殺されそうになり、エジプトへ奴隷として売り飛ばされてしまったのです。しかし、彼はエジプトで成功し、ついには農林

大臣にまで出世しました。その時です。かつて彼を売り飛ばした憎い兄弟たちが、飢餓のために彼の元に食料を買い求めに来たのです。その時、彼は自分の目を疑いました。今こそ復讐のチャンスが来たのです。しかし、すっかり変わった兄弟たちの姿を見て、彼は復讐ではなく、彼らを助けたのです。兄弟たちの自分に対するかつての非情な仕打ちは、実はあらかじめ自分をエジプトに遣わして、将来の家族の必要を満たすために、神が計画したことであつたことを知りました。その時、ヨセフは右のような聖書のことばを兄弟たちに向かつて語りました。私たちも現時点では理由が分からない困難に直面していても、愛の神は、私たちに最善のものを備えておられるのです。そのように受け止めることが出来るのは、神を知る者の特権です。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従つて召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてください。益とを私たちは知っています。」とパウロは言いました。全ては益となるように、神はご計画していただくのです。これは何という素晴らしい確信ではないでしょうか。

◆人生の目的に悩むとき

こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何

をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。

新約聖書・コリント人への手紙第一 一〇章 三二節

には本当の幸福はないのです。

多くの人が人生の目的に悩み考えましたが、人生の目的を明示できませんでした。それは、人生の目的とは創造者としての神の存在を認めるか認めないかという、この一点に掛かっているからです。ですから聖書以外にこの問題に明快な答えを与えたものはありません。もし人間が偶然に存在するようになったのであれば、目的はないのです。偶然の存在に目的を見いだそうとすることは無意味ことなのです。しかし、人間の存在が必然であれば、つまり、神が創造したと言うのであれば、その時、目的はあるのです。神は目的を持つて人間を造られたからです。ですから、人生の目的とは、結局創造者である神を認めるか認めないかという問題に集約されていきます。創造者なる神を認めるとき、私たちは創造した神が目的を持つていたことを知ることが出来ます。人間が物を作るとき、自分のために作るように、神も全てのものを最終的にはご自分のために創造したのです。神御自身のすばらしさ(栄光)が現れるためでした。ですから、神を信じる者は、この神のために、またその栄光の現れのために生きます。私たちは自分の人生を最高のものにささげたいと誰もが願うことでしょう。創造者である神以上にすばらしいものは、他に何もありません。しかし、多くの人々は、人間が自分の手で作り出したもののために生きています。そこ

第三部

キリスト教への質問に答えて

私は、これまでもキリスト教についていろいろな質問を受けて来ました。ここではキリスト教についてよく尋ねられた一般的な質問を取り上げました。第一部を読んで、なお疑問に残ると思われるような事柄を集めました。一部が積極的にキリスト教の知識を提供したのに対し、ここでは誤解を解くことでキリスト教についてお答えしたいと思っております。

問一 イエス・キリストとは、どういう意味ですか。

「イエス」は苗字で「キリスト」は名前だと考えている方がいますが、そうではありません。「イエス」だけが彼の名前で、「キリスト」は彼に付けられた称号です。「イエス」という名前はイスラエル人が好んだ名前で、旧約聖書では「ヨシユア」となつて出てきます。このヨシユアをギリシヤ語風に発音すると「イエス」となるのです。その意味は「主は救い」という意味です。なお新約聖書の中には、他にもイエスという名前の人物が登場します。一方「キリスト」という称号は、「油注がれた者」という意味です。油注がれた者とは、即ち「救い主」のことです。旧約聖書の「メシヤ」というのも同じ意味で、このメシヤがギリシヤ語に訳されてキリストとなりました。ですから、私たちがイエス・キリストというとき、それは「救い主イエス」

と言っているのです。

問二 イエス・キリストは本当に実在したのですか。

このような質問が出されるのは無理がないかもしれませんが、イエス・キリストが現れた頃、日本はまだ有史以前だったからです。しかし、キリストの実在性については、これまで疑われたことは一度もありません。イエス・キリストが、もし実在しなかつたならば、歴史上のいろいろな出来事が説明できなくなつてしまいます。そればかりでなく、実はイエス・キリストについては、客観的な文書による記述が多数残されています。イエス・キリストは、聖書にだけ記録されているわけではありません。聖書と同時代の数々の歴史的书物も、イエス・キリストについて述べています。例えば、有名なのがローマの歴史家タキトゥス（六十年から百二十年頃）の『年代記』です。そこには、イエス・キリストについて、次のような記録が残されています。「ローマの大火事はネロの命令によるものだ」といううわさをぬぐい去るために、皇帝ネロは、一般にキリスト教徒と呼ばれて、その忌まわしい行為のゆえに憎悪されていた人々を犯罪者に仕立て、残虐の限りを尽くして彼らを罰したのである。キリスト教徒という名前は、キリストから来ているのであるが、こ

の人物はテイベリウス帝の治下に、ポンテオ・ピラトの手によって死刑に処せられた。」ローマの歴史家タキトゥスは、キリスト教に対して好意的ではありませんでしたが、イエス・キリストの年代については正確な記述を残していると言えます。その他にもイエス・キリストに言及した多くの文書がありますが、それらの記述は驚くほど聖書の福音書と一致しています。よって、イエス・キリストが実在したことは疑いの余地は何もありません。

問三
聖書とはどんな書物ですか。旧約聖書と新約聖書の違いは何ですか。

聖書がどのような書物か、短時間で説明することは容易ではありません。しかし、一言でいうと罪と滅びの中にいる人間がどのようにしたら救われるのか、その救いの道を神ご自身が人間に示した書物である、と言えるでしょう。聖書は大きく旧約聖書と新約聖書に別れています。旧約聖書は三十九冊の書物からなり、イエス・キリストが誕生する以前に書かれました。その年数は、およそ紀元前千三百年頃から紀元前四百年頃まで九百年間に渡っています。そこには、古代イスラエルで生まれた律法、歴史、預言、文学などが記されています。一方、新約

聖書は、二十七冊の書物の集められたもので、イエス・キリスト出現以後、紀元後五十年から百年までの短期間に書かれました。そこには、イエス・キリストの生涯を記録した福音書、初代教会の歴史をつづった使徒の働き（使徒行伝）、キリストの弟子たちによつて書かれた手紙や黙示録などです。以上のような六十六巻の書物の集まりである聖書は、その千四百年間に渡る長期間の形成とあらゆるジャンルを含む四十人以上の筆者が動員された多様性にも関わらず、そこには驚くべき統一性があります。そこには、イエス・キリストを指し示すという唯一の目的が貫かれています。

問四
聖書に書いてあることは本当に信用できるのですか。

このような疑問は、聖書の古さから言えば当然かもしれません。なにしろ、聖書は、日本の有史以前から存在しています。しかし、聖書の正確性、信頼性については、近年膨大な考古学的発見がなされ、書誌学的研究が進歩し、その歴史的信頼性が確立されてきました。かつて聖書にしか現れず、それゆえに疑われていたような都市の名前が、実際に発掘によつて現れてきました。これまで発見されてきた歴史上の文書や発掘の証

拠は、聖書の記述と良く一致しています。新約聖書の場合は、客観的な記述の確かさと同時に、イエス・キリストの直接の目撃者の生存中に書き上げられたという特徴があります。それは、もし間違いがあれば、訂正することが出来る期間内でした。この点仏典とは違っています。仏典は、仏陀の死後、何百年も経つて、すでに直接の目撃者が誰もいなくなつてからまとめられたものです。しかし、新約聖書の記述は、イエス・キリストを直接目撃した人々が大勢生存していた時に、記されました。ですから、その記述に誤りが指摘されれば、訂正し得る時間内にすべてがまとめられたのです。ここに聖書の信頼性の重要な根拠があります。

問五
キリスト教は、なぜ多くの教派に分かれているのですか。

仏教でもイスラム教でも、一般的に長い年数を経た諸宗教で、教派のない宗教はありません。それは、信仰を継承した人々がその時代の影響下で少しずつ理解を変えていくのでやむを得ない面があります。しかし、キリスト教の場合は、基本となる聖典の範囲が「六十六巻の聖書」と決まっているので、宗旨や教理の面で大きな違いはなく、聖書から大きく逸脱した教派は「異

端」として退けてきました。従つて、聖書を基本とした教派では細部では違つても中心点では一致しています。今日、大きく分けるとキリスト教には二つの教派しかないと言うことが出来るでしょう。それは、聖書を絶対的な規準として受け入れている教派と受け入れていない教派です。聖書を規準としている諸教会は、外面的に組織や教派の名前が違つていても、教理において共通した理解を持っています。それなのに外面的に教派がたくさんあるように見えるのは、「教えの違い」に由来するのではなく、もつぱら歴史的な理由によることです。日本の場合を考えても、戦前からいろいろな国々が宣教師を送つてきて、キリスト教は少しずつ広まつて来ました。そして、宣教師たちは、日本に來ると自分の所属する「団体」や「教派」の名前を付けて教会を形成して来ました。それは、やむを得ないことでした。そのような団体が一体いくつあるのか私自身も知りません。しかし、聖書の権威を認めている正統的なキリスト教では、団体名が違つていても、信じている中心的内容は驚くほど一致しています。ただ聖書が明示していない細かな部分においてだけ違つているのです。例えば、洗礼の仕方はどうするのか、教会の運営の仕方どうするのか、などなどです。しかし、これらはキリスト教にとって二次的な問題であつて、それゆえ各教派は互いに違いを認めあつて共に歩んでいます。ですから、なぜ多くの教派があるのかという質問は、それ自体必ずしも当たつてはいません。

問六

信じる者だけを救うというのは、キリスト教は心が狭いのではないですか。神は愛ならば全ての人を救うべきではないでしょうか。

信じることだけが救いの条件であれば、これは最も心が広い宗教だとも言えるのではないのでしょうか。信じるということも、誰でも、どんなときでも、出来ることであり、事実上全ての人に等しく、最も広く、無料で救いのチャンスを提供しているのです。信じることだけが必要条件であれば、死の間際にでも、子供でも出来るのです。事実臨終の床で信じる人々も多々います。信じることは、心の中の活動ですから、身体の不自由を失っていても、何ら問題にはならないのです。信じるだけということは、事実上ただで、自由に与えているのと同じことです。これ以上、救いの門戸を広げるべきであるというなら、救いを望まない人々をも、本人の意思に反して強制的に救うことしかありません。しかし、それをするを人間は本当に望んでいるのでしょうか。そのようなことをすれば、それこそ人間の尊厳や自由を侵すことになります。

この「キリスト教は狭い」ということでよく言われるのは、クリスチャンは葬儀の時お焼香を行わないので、「狭い」と非難されることがあります。しかし、これは誤解です。問題は仏教の習慣を、無理矢理クリスチャンに押しつける方が「心が狭

い」のであって、むしろいろいろな違いを互いに認めて、その違いを受け入れ合うならば、何の問題も起きないはずですよ。

問七

キリスト教世界の中に、宗教戦争があるのは、何故ですか。

宗教が原因で対立があるのは、実に残念なことですよ。しかし、今日、テレビニュースなどで、プロテスタントとカトリックの争いがあったり、キリスト教徒とイスラム教徒とが紛争を起したりしているのは、純粹に宗教が原因ではありません。そこには民族的、歴史的、経済的、社会的な要因が複雑に絡み合っているのです。そこに宗教的要素があっても、その場合の宗教とは先祖から継承されてきた民族的宗教がほとんどで、私がこれまで論じてきたような意味でのキリスト教徒と考えることは出来ないでしょう。歴史上その良い例は中世の十字軍です。しかし、歴史の中で、キリスト教徒が純粹に宗教で争ったことが僅かな期間ありました。それは、キリスト教徒であっても罪人である弱さのゆえに宗教戦争が引き起こされました。同時に、もう一つの原因は、「信教の自由」を求めての戦いでした。しかし、歴史の中で、全ての自由は戦いを通して勝ち取られたものです。信教の自由も例外ではありませんでした。ですから今

日、そのような戦いのゆえに私たちにも信教の自由が与えられているのであれば、私たちはその戦いに感謝こそすれ、そのための戦いを批判することは出来ないでしょう。

問八 カトリックとプロテスタントの違いは何ですか。

十六世紀の宗教改革の時、マルティン・ルターは、当時のカトリック教会の免罪符などのやり方に反対して抗議行動をおこしました。その際、最も中心的問題となつたのは、聖書に書かれてあることをどのように評価するかでした。ルターは、聖書研究に生涯をささげ、聖書の全面的権威を認め、その上に教会を建てようとなりました。一方、カトリック教会は、聖書の権威と同時に、教会が受け継いできた伝承を拠り所としました。ですから、聖書には含まれていない事柄も入っています。その大きな違いの一つは、マリヤに対する評価です。聖書ではマリヤは普通の女性です。イエス・キリストを生んだ後、夫のヨセフとの間に何人も子供を産みました。しかし、カトリック教会にとってはマリヤは聖母であり、処女であり、信仰の対象です。これは、聖書から導き出されたことではなく、カトリック教会の伝統の中で生み出されてきた考え方です。またローマ法王をどのように評価するかもカトリックとプロテスタントでは大い

に違っています。カトリック教会ではピラミッド型組織の頂点に立ちますが、プロテスタントでは、彼も一人の信徒以上の者ではありません。神の前にすべての人は平等です。このように、両者はある意味で別の宗教です。プロテスタントは聖書に立脚した宗教ですが、カトリックは教会という組織の権威の上に立つた宗教と言うことが出来るでしょう。

問九 キリスト教では人類の始まりはアダムとエバ（俗称イブ）と言っているようですが、人間は、進化して生まれてきたのではないですか。

進化論は、日本においては過大評価される傾向があります。進化論の専門家さえ、進化論が未だに証明されていないことを認めています。ダーウインさえ、進化論の難点を正直に認めて、彼の名著『種の起源』の第六章の中で論述しています。進化論は未だに仮説の段階であり、すべての人が納得しているような確定した学説は何もないということは、忘れられてはならないことです。進化主義という主義・思想だけが一人歩きしているのが現実です。しかし、仮に進化論が証明されたとしても、聖書それ自体と矛盾するとは言えません。ダーウインが論じたのは「種」の起源であつて、「生命」の起源ではありません。

一方聖書の創世記は、もっぱら動植物の生命の起源を語っています。その生命から、現在あるような多様な種がどのように発生したのかは、分かりません。ですから、進化論と聖書の矛盾というのは、言われているほど決定的なものではありません。問題は、進化論から派生した進化主義という哲学が聖書との対立を煽ってきたのです。しかし、聖書が聖書の主張に留まり、進化の仮説がそこに留まるならば、両者を無理に対立的に考えることはないでしょう。

問一〇

『ものみの塔』という雑誌をもつて勧誘に回っている人々もキリスト教ですか。

『ものみの塔』という雑誌を熱心に配布したり、売り歩いたりしている人々は、「エホバの証人」と呼ばれています。十九世紀の末にアメリカで生まれたキリスト教の異端の一つです。彼らはキリスト教と自称しますが、キリスト教とは言えません。なぜなら、キリスト教の中心であるイエス・キリストを神とは信じていないのです。つまり初代教会からすべてのキリスト教会が信じてきた三位一体を熱心に否定します。そのために、イエス・キリストによる救いは不十分なものでしかなく、救われるためには、自分たちの熱心な伝道という行ないが必要だと信

じています。彼らの熱心は、そこから生まれてくるのです。彼らを熱心に駆り立てているもう一つの動機は、世界の終わりが近い終末意識を煽ることです。しかし、世の終わりについて彼らの予言はいつも変えられてきました。

問一一

神がいるなら、なぜ神は、人間を戦争や苦しみから救わないのですか。

人間の苦しみを見て「神も仏もない」という言い方がよくなされます。確かにこれは、最も困難な疑問の一つといえるでしょう。聖書に登場する人々も、この問題に悩んできました。しかし、よく考えてみると、これは神について、また人間についての誤解から来ているようです。まず神について、神とは「人間の苦しみを救う者」という神理解です。丁度お人好しのおじいちゃんが孫の失敗の尻拭いをするように、神とは人間の不幸や苦しみをぬぐい去るためにあると考えられています。こうして、神は永遠に一人一人の人間をその不幸や苦しみから奇跡的に救い出す、お人好しの神でなければなりません。しかし、神とはそのようなお方ではありません。神は人間の奴隷ではなく、お人好しの世話好きでもなく、天地万物の創造者であり、人間こそ神に仕えるべきなのです。ですから、神というものを人間

のご都合のために存在していると考える神への誤解がここにはあります。また人間についての誤解もあります。「神も仏もない」と言うとき、そうなるに至った人間の側の責任は問われていません。しかし、何よりもその責任は人間にあるのです。人間が贅沢な物を食べるようになり、その結果病気になっても、また環境汚染の結果、難病となっても、その責任は神にあるのではなく、人間にあるはずです。ですから、神に向かつて何故救わないのかと問うことは、お門違いとなるのです。ただ、純粋に分らない場合もあります。全くの天災などの場合、私たちはどう考えるべきでしょうか。それは、最も困難な問題です。しかし、神は私たちのために御子をも惜しまれない方ですから、なお神の最善を信じることが出来ます。神の栄光の現れのための機会とされることを信じることが出来ます。

問一二 宗教は結局どれも同じではないですか。

確かに宗教には共通した要素があります。それは自分以外の何かに信頼するという要素です。信仰心と言っても良いかもしれません。その側面ではどの宗教もよく似ています。しかし、問題は何を信じるのか、信じる内容、あるいは信じる対象が最も重要です。なぜなら、人間は自分が信じるところのものになっ

て行くからです。信じているものに従って生きて行くからです。その信じる内容から宗教を考えていくと、諸宗教の間には非常に大きな違いがあります。特にキリスト教の場合は、信じる対象が重要です。その内容とは、すでに第一部で話してきました。しかし、ここでは次の点を考えていただきたいのです。すべての宗教家の中で、イエス・キリストは特別に際だつた存在だということ。歴史上、彼だけが「わたしが道であり、真理であり、いのちである。」と明言しました。多くの宗教家たちは自分以外のものを指して、これが道だ、これを信じなさいと説きました。彼だけは自分を指して、自分こそ道であり、真理であり、信ずべきものであると、主張されたのです。それは他の宗教と決定的に違います。彼は自分が神であるとの主張通りに生き、事実死から復活しました。ここには、他と比べられない無比のユニークさがあります。

あとがき

この書物は、初めてキリスト教に触れる方々を念頭において書かれました。キリスト教について、更に詳しく知りたい方は、お近くのキリスト教会へ行かれることをお勧めいたします。教会は、初めての方々を心から歓迎してくれるところです。ほとんどの教会では、日曜日の朝十時頃から礼拝を持っています。それは、牧師の説教と会衆の讃美や祈りを中心とした集いです。礼拝の中ではたいがい献金の時がありますが、これは強制ではなく、自由なものですから初めての方はする必要はありません。また礼拝後に牧師と個人的に話すときを持つと良いと思います。

また週日、教会に電話をして、牧師と面会することもできません。思い切って教会へ行ってください。教会は一度行ったら抜け出られないというような場所ではありません。自分に合わないければ、別の教会へ移ることも自由です。

どこの教会が良いのかを識別することは、初めての方には困難でしょう。一般的には聖書に忠実な教会が、良い教会と言われるべきでしょう。教会を紹介して欲しい方は、下記著者紹介にあります電話番号にご連絡ください。お近くの教会を紹介できると幸いです。

お読みなった方々が、主イエスとの出会いを経験できるように、祈りつつ。



鞭木由行(むちき・よしゆき)

1950年東京都出身。聖書宣教会、ゴードン・コンウェル神学校、
ジョーンズ・ホプキンス大学大学院、リバプール大学大学院卒業。哲学博士。
現在、生田丘の上キリスト教会牧師、聖書宣教会教師。

電話: 044(955)1941 e-mail: ymuchiki@fa2.so-net.ne.jp

<著書>

Egyptian Proper Names and Loanwords in North-West Semitic (Scholars Press)

『安息日と礼拝』(いのちのことば社)

『聖書が本当に言っていること』(ノア企画)

<訳書>

ミラード著『聖書時代の秘宝』(法政大学出版局)



**聖書が本当に言っていること
(Web版)**

2002年9月15日 初版
2006年7月31日 第2版

著者 鞭木由行
制作 IOCCpress

鞭木由行 © 2002-2006